



2023年11月
第743号

日本基督教団 平塚教会
発行人 平塚教会
編集人 中山洋司
〒254-0045 平塚市見附町6-18
電話 〇四六三(32)八八三一



モヤモヤを言葉にする

平塚教会牧師 北川一明

実に、人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われるのです。

(ローマ一〇・10)

「初めに言があった(ヨハネ一・1)」とある通り、キリスト教は「言葉の宗教」と言われます。なんとなく感じていることを言葉にして整理すると「体験が経験に(森有正)」昇華されます。CS(教会学校)クリスマス礼拝の讚美歌を選ぶにあたって、選ぶ基準を整理して考えたところ、気付いたことがありました。

礼拝の讚美歌は好みで選曲されるものではありません。主日礼拝は神を賛美するために歌います。原則として説教者が聖書や説教内容に即して決めます。

CSや幼稚園の礼拝には、賛美とは別の要素が混じります。CSは伝道に比重が傾きます。幼稚園はさらに教

育目的が強まります。讚美歌も目的に基づいて決めます。伝道目的であれば、CS生徒が高校生、大学生になってからでも思わず口ずさんでしまうような歌を選ぶと良いでしょう。

CSや幼稚園では、二十世紀末から「ドンドコ、ドンドコ歩いて行けば…友だちが来て」「どんな時でも…苦しみ負けず、くじけてはならない」といった歌が、歌われてきました。神を賛美するというよりも教育効果を狙った曲です。私の「好み」ではないので、自分が説教する場合にはこうした曲は選びませんでした。「CSや幼稚園では、こういった類いの歌が歌われるものだ」と放置してきました。たんに「好みてない」で片付けず、なぜ避ける気持ちが生じたかを考えました。

擬音語の繰り返し返される「ドンドコ・ドンドコ」は幼児には歌い易く、幼稚園でよく使われます。しかし中高生にとっては格好悪くて歌えないでしょう。出席者から考えると今の平塚教会CSでは選べません。

「どんな時でも…イエスさまの愛を信じて」は、別の意味で思春期の若者には嫌われそうです。本人たちは「恥ずかしいから」としか自覚しないかもしれません。しかし子どもは、タテマエを押しつけられる被害を家庭

目次

モヤモヤを言葉にする

牧師 北川一明 …1

みんなでつくる運動会

教諭 伊東未来 …3

編集後祈

…4

や学校で日常的にこうむっています。歌詞の内容自体は正しいとしても、大人自身も「イエスさまの愛を信じて、どんな時にもくじけない」わけではありません。若者は歌詞に偽善を嗅ぎ取って気恥ずかしいのです。

そうしたことを漠然と感じていた私は「朝日うけて小川流れ」「小鳥たちは（小さくとも）」などの昔の『ごどもさんびか』が良いだろうと思っていました。自分が親しんで来たので「棄て難い」という気持ちもありました。でも考えてみれば昔の讚美歌にも大人の押しつけや偽善を感じさせるものがたくさんあります。

それでも昔の讚美歌の方が、文化的には優れた歌詞を保っています。それが「歌詞が難しく子どもには理解できない」という理由で、三、四十年前から歌詞が口語化を通り越して「話し言葉化」されました。「正しくよくあらまし、なすべき務めあれば」は「あらまし」の意味が不明です（それでもなんとなく分かります）。それを「真実に清く生きたい、誠実な友のために」と歌えば小学校高学年でも意味が通じます。ただ「ダサイから口ずさみたくない」

と思われそうです。

歌はメロディで覚えます。後になって歌詞の意味が分かったということは、大人でもあります。『主よみもとに近づかん（四三四／I三二〇）』の「登る道は十字架にありとも、など悲しむべき」の中で「アリトモナド」は、すぐには何のことか分かりません。そうかといって、それらを話し言葉で歌わせてはダサくて嫌がられます。

讚美歌を口ずさんでほしいのなら、子ども目線で考えるべきでしょう。

ただし大人の考える「子ども目線」が本当の子どもの視点とは限りません。大人が「わり、子どもらしくて可愛い！」と感じるステレオタイプの典型例を「子ども目線」と勘違いしていることは、よくあります。

「お星が光るピカピカ／ラクダが通るカポカポ」は、幼児に歌わせるぶんには名曲と感じています。CS教師は、かつては大学生も務めていました。中高生でも教師を補佐しました。大学生、中高生が「幼児に歌わせたら可愛いだろな〜」と思えばこの曲を口ずさむかもしれません。名曲が伝道に役立ちます。しかし中高生を「ピカピカ」だの「カポカポ」だのと歌う側に据

えるのでは、せっかくの名曲が伝道の妨げになりかねません。

本当の「子ども目線」が必要です。ただその一方で、子どもが喜ぶものを選べば良いともいえません。理想を掲げて導こうとしている以上、偽善的な印象を与えるものでも選ぶべき場合があります。

古い曲には、今は差別語、不快語とされるようになった言葉が残っています。特にクリスマス曲に多いのは、それなりに理由があります。追ってご紹介します。

讚美歌について漠然と感じていたことを言葉にして整理すると、「子ども目線」と信じ込んでいた勘違いに気付くことができました。もともと、それは信仰を言葉で整理するということの一例に過ぎません。本稿でお伝えしなかったのは、讚美歌のことだけではありません。ふりかえって言葉にしてみることが信仰のヒントになるということなのです。

心で信じたことを言葉で表現する時、信仰が一步前に進みます。さらにその言葉を公に宣言することで、自身の人生に対する責任を、新しい仕方でも負い始めることができるのです。

みんなできつくる運動会

幼稚園教諭 伊東未来

10月7日、崇善小学校体育館で運動会を行いました。今年の運動会は、子ども達から、こんなことをしてみたい！こんなものをやってみたい！というものをプログラムとして作りました。運動会にむけて当日までの経過をお話します。

まず子ども達に、今年も運動会を行うのかどうか問いかけました。すると、皆が迷うことなく、一斉に「やるー！」との声が上がりに行くことに決定致しました。

次に、運動会は、どういうことをするのか尋ねました。子ども達からは、運動会は「かけっこか対決することだよ！」「皆で、ダンスやリレーをすること！」「ママとパパとも一緒にやるものもあるよね」と沢山の意見が出ました。年長児は年少より運動会をしているせいか、イメージはついてきているようでした。そこで、「では、運動会は誰がやるものだろうか？どんな、運動会をやりたいの？」と聞いてみました。すると、「運動会は、年少さんと年中さんとやるもの！」「運動会は、皆で決めて、好きなことをしてみたい！」という意見が出

て、やりたいことを皆で話し合うことになりました。

話し合いは、年長児になると、字が読める子が多いので、ホワイトボードに意見を書きながら進めます。そうすることで、保育者も子ども達も、目で見て整理をしながら行えます。また、中には字が読めない子もいますが、その時には、友達同士で教え合っている姿が見られます。

やりたいことは、体操やリレー・ダンスを意見が割れることなく決まりました。しかし、「もう一つ、競技ができますよ」と声をかけると、今流行っている「座敷童子と海賊をやりたい」という意見ができました。反対派からは「座敷童子は着物を着ているけど、幼稚園には着物が無いから無理じゃないか」「海賊は本物の船と剣がないとだめだからできないよ」「一つずつ競技をしたら、次やる人が遅くなっちゃうよ」との意見がありました。この話し合いは、三日間続きましたが、二人の男の子が、「座敷童子と海賊をくっつけてやったらいいじゃない？」「着物や船は、お部屋に材料があるから、皆で作るのはどう？」との意見があり、皆は、「いいと思うー！」と賛成の拍手をしていました。

そこで、どのようにやるのかも相談すると、「競争にしたい！」と声があり、競争形式に決まりました。そしてスタートやゴールの場所もホワイトボードに図を描きながら決めました。競争するチームも、自分達で考え決めていました。

子ども達の話し合いでは、保育者は進行役として、言葉を掛けず見守るようにしています。その中で、話がテーマからずれたり、意見をどう決定したらよいか、同じ子ばかりが意見を言うなどの際は、軌道修正をしています。

次に年少・年中児への「運動会のお誘い」です。最初から、「年少さんと年中さんを誘いますよ」とは伝えずに、「年少さん、運動会初めてだよね…出来るかな？まず、運動会やるのかな？？」と問いかけました。すると、「うーん、もしかしたらやらないっていうかも」「運動会がわからないじゃない？」と意見を言い合う姿が見られました。また、その意見に対し「じゃあ、お手紙を書いて年少さんと年中さんに運動会のお誘いしてみようよ」と提案をする子もいます。しかし、年少児は、字が読めないことに気づいた子が、「年少さんの部屋に直接行ってお誘いと運動会のルールを



体操の練習

教えてあげるのは、どう？」と皆に聞き、全員が賛成しました。

年少と年中への説明を終えてクラスに戻ってきた子ども達に「年少さんに説明してどうでしたか？説明だけで、出来そうですか？」と尋ねると「もしかしたら、かけっこかママの所に行っちゃいそう」「皆が走っている時に、出てきちゃいそう」と声があり、年少係を決めることになりました。しかし、21人全員が年少係に行くと、年中児競技の用具を運ぶ人やゴールテープをやる人が誰もいないことを話すと、「じゃあ、係をたくさん作ったらいいんじゃない」という意見から、年少・年中・体操・放送・ダンス・こひつじ・未就園の係をつくり、役割を分担することになりました。

係決めの時、なぜか年中係りだけは、人気が無く誰一人いませんでした。理由は「今

の、年中さんは、朝の会とか廊下をずっと走っているから、捕まえるのが大変」と言っていました。「でも、年中係りに行かないと、運動会が楽しくできないよね」と気付き、他の係りから移動してくれる子や係りを二つ兼任する子もいました。係りが決まった後は、誰が何係か分かるように自分で布に字を書き、名札を毎日付けて練習していました。

放送係の子と原稿を一緒に作った時に「あ、そういえば、僕、字が読めなかったんだ」と自信がなくなる子もいました。そこで、「自分達でやると決めたからには、先生は手伝えることは出来ないけど、どうする？」と聞いてみると、「でも、放送係になりたいから、やってみる！」と同じ係の子と一緒に原稿を見ながら、一生懸命練習していました。

手元に配るプログラムと大きなプログラムは年長児が作りしました。プログラム作りでは、下書きを見ながら書く子もいれば、すらすらと自分で字を書く子、お友達と協力して書く子もいました。「うんどうかい」「がんばるぞ」の看板は年中児が作りしました。字は子ども達で書き、その上に絵の具を塗った千切り紙を糊で貼りました。周り

には、年少児の絵や年長・年中児の手形が付いています。園児達は、自分達で作ったプログラム、看板を見て「世界一の運動会」「世界一のプログラム」と呼んでいました。運動会の旗も手書きの旗を描き当日を迎えました。

保護者の方のアンケートには、「家に帰ってきて『今日は、年少さんの係りをしたんだよ！』『年中さんの競技はね』と運動会についてお話をすることが多くなったようです。また、自分達の競技説明をするだけではなく、係りをする事で他のクラスの競技を説明してくれるので楽しみです」との声がありました。

保護者の皆様には、運動会後に椅子や旗などの片づけを一緒にして下さり、感謝しております。これからも、子どもの意見や気持ちを引き出しながら活動を進めていくと共に、保育者も保護者も楽しい保育であるよう日々努めていきます。

編集後祈

主のみ名を賛美し、主の御降誕を準備する月になりました。真の愛と誠の信仰を身につけながら準備できますように

(編集子)